

地域戦略研究所紀要

第 2 号

地域指向型アートプロジェクトの比較分析と地域活性化効果

田代 洋久 …… 17

北九州市立大学
地域戦略研究所
2017.3

地域指向型アートプロジェクトの比較分析と地域活性化効果

田代 洋久

- I 研究の背景と目的
- II 地域指向型アートプロジェクトによる地域活性化
- III 地域指向型アートプロジェクトの事例
- IV 事例の比較分析
- V 地域経済社会の変化
- VI まとめ

<要旨>

本研究は、創作活動により地域の魅力を高め、地域活性化を目指す地域指向型アートプロジェクトの可能性に着目する。事例研究として、「瀬戸内国際芸術祭」と「混浴温泉世界」の諸特性を比較し、開催地（直島町、小豆島町、別府市）の地域経済社会の変化を人口・経済統計により分析した。直島町では新規開設事業者の増加が見られる一方、雇用吸収力は限定的であることが示されたが、政策効果の検証には多角的な検討を必要とする。

<キーワード>

アートプロジェクト (Art Project)、地域活性化・地方創生 (Regional revitalization)、統計分析 (Statistical analysis)、文化政策 (Cultural policy)、観光政策 (Tourism policy)

I 研究の背景と目的

人口減少、地域経済の衰退、地域格差の拡大など地域経済社会を取り巻く環境は厳しい状況が続いている。国が提唱する「地方創生」の実現に向けて、多くの地域では取り組みを加速させているが、目標とされる①しごとの創生、②ひとの創生、③まちの創生の実現は容易ではなく、地域力を高める内発的な取り組みと適切な地域戦略が欠かせない。

こうした中、歴史、文化、暮らしといった文化的資源や創作活動の活用によって、地域の魅力を高め、交流人口を通じた地域活性化を図る取り組みが注目されている。例えば、地域再生をテーマとしたアートプロジェクトでは、限界集落や離島、衰退した中心市街地などにおいて、サイトスペシフィックと呼ばれる場所性を重視した創作手法が用いられる。分散配置された展示作品を巡り歩く来訪者の行動はまちあるきと同一であり、地域特産品の購入などの観光消費によって地域経済の活性化に寄与するだけでなく、アーティスト、ボランティア、来訪者等と地域住民との交流を通して、地域社会の活性化が期待されている。

アートプロジェクトによる地域活性化については、様々な視角より論考が行われている。例えば、北川(2014)は、企画サイドの立場から大規模アートプロジェクトの嚆矢である「大地の芸術祭」の経緯と意義を検証し、地域活性化への貢献を強調している。澤村(2014)は、「大地の芸術祭」を事例に、経済効果やソーシャル・キャピタルの形成など多角的な視点から詳細な検証を行い、アートイベントとしての経済効果、社会的効果を認めつつも公共政策としては疑問が残ると結論づけている。藤田(2016)は、地域活性化を目的とするアートは、現代アートが本来持っている批判的精神を削ぐことになるとして、いわゆる地域活性化を目的とした「地域アート」に対する批判的な論考を行っている。

一方、アートプロジェクトによる地域活性化にかかる多くの論考では、来訪者の増加による経済波及効果や、地域住民との交流など短期的なイベントとしての評価が多く、定住人口の増加や地域経済への寄与など持続的な地域活性化への道筋は明らかではない。

本稿では、瀬戸内海の離島を舞台に「海の復権」を唱える広域型アートプロジェクト「瀬戸内国際芸術祭」と、別府市の中心市街地においてアートによる地域活性化を模索する別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」の比較分析を行ったあと、観光、人口、経済分野の公的統計を用いてアートプロジェクト開催地（直島町、小豆島町、別府市）の地域経済面での変化に焦点を当てた基礎的分析を行い、地域政策の視点からアートプロジェクトによる地域活性化の意義と課題の検討を行うことを目的とする。

II 地域指向型アートプロジェクトによる地域活性化

歴史や文化など地域の文化的資源を発掘し、魅力や価値を高めることで交流人口を増加させ、地域活性化を図ろうとする取り組みが注目されている。まちづくりの要素を加味しながら交流人口の拡大を図る取り組みは「観光まちづくり」と呼ばれ、観光消費による経済波及効果だけでなく、地域住民や事業者の参画を通じたまちづくりの推進や、地域内外の交流によって地域の誇りやアイデンティティを回復しようとする含意がある。しかし、自然災害の発生や都市化の過程で、自然景観や風情のある歴史的な町並みは次第に消失し、特色ある文化的資源を保有する地域は限られているのが実情である。そこで、交流人口の増加に向けて、文化的要素に着目した創造的なアプローチが模索されている。

アートプロジェクトを地域活性化に活用する取り組みもその一つで、多くの地域で近年、急速に関心が高まっている。一般的には、地域外からアーティストを招聘して、地域からインスピレーションを得て作品制作を行ってもらい（Artist-in-residence program）、地域内に完成した作品を分散設置（展示）し、一定期間、地域外から来訪者を招くプログラムとして構成されている。作品を訪ね歩く過程で、地域の自然、景観、歴史、文化、くらしが体感できるよう設計され、地域の食材や特産品などの観光消費を楽しむ観光プログラムも併設されている。

一方、アートプロジェクトには様々なタイプがある。美術館、博物館、劇場といった文化施設における企画展やワークショップの他、地域コミュニティの活性化などまちづくり

メニューとして行われるアートプログラムを指す場合もある。例えば、学校教育でのプログラムや、高齢者や障がい者など多様な市民が参加するアートプロジェクトでは、人間形成や人材育成、いきがいの創出、コミュニティ形成など豊かな地域社会の創造に主眼がおかれている。

本稿では、有形無形の地域資源を用いて創作活動を行い、地域住民や事業者など地域内のアクターとの有機的な関連付けながら実施することで、地域経済社会に多元的な効果をもたらすアートプロジェクトを「地域指向型アートプロジェクト」と定義しておく。

一般に、創作活動の外部効果として、有形、無形の新たな資源を生み出す創造力と、衰退した無機的な空間を有機的な空間へと変質させる価値反転能力への期待がある。例えば、欧米の衰退都市の再生では、古い建造物の価値を見直し、歴史性のある建造物の転用や公共空間を利用した創作活動を奨励することで、空間イメージの改変による地域活性化に取り組んでいる。芸術文化の持つ創造性に着目した都市再生は創造都市モデルとも呼ばれ、歴史的建造物の再生などのハードから市民活動の活性化などのソフトまで幅広い可能性が指摘され、多くの都市で政策展開がなされている。近年は、都市部のみならず、地方都市や小規模自治体においても、創作活動に着目した地域再生モデルが模索されている¹⁾。

こうした背景を踏まえ、地域指向型アートプロジェクトでは、作品鑑賞を目的に訪れる来訪者の宿泊、飲食、土産購入などの観光消費に伴う経済的効果だけでなく、来訪者やボランティア、アーティストなどとのさまざまな人的交流に伴って生起される社会的効果、場所性をテーマとした新たな創作手法の開発などの文化的効果、アートプロジェクトに触発された市民レベルの文化活動の推進に伴う社会教育的効果といった多元的効果が期待されている。

地域指向型アートプロジェクトでは、これまで異なる政策分野として認識されてきた芸術文化、観光、地域産業、コミュニティ、教育、社会基盤整備などが一体的、融合的に展開できる可能性がある。これを地域課題解決の視点で見ると、地域住民のニーズを満たしつつ、地域の魅力を高めることで交流人口を増加させる混合型のアプローチであり、地域アイデンティティを高めながら地域経済と地域社会の活性化を同時に図る可能性として解釈される。

Ⅲ 地域指向型アートプロジェクトの事例

1 瀬戸内国際芸術祭

「瀬戸内国際芸術祭」は、直島（香川県直島町）を中心に、瀬戸内海の離島（直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、沙弥島、本島、高見島、粟島、伊吹島）と沿岸部の港湾である高松港（香川県）、宇野港（岡山県）において、廃校舎、空き家、自然空間などを活用して現代アート作品を制作配置し、地域住民・ボランティア・アーティスト間との交流と、分散配置された作品を巡るまちあるきを通して地域活性化を目指す広域型アートプロジェクトで、2010年より3年に一度開催されている。

開催趣旨は、瀬戸内の島に活力を取り戻し、「瀬戸内海がすべての地域の「希望の海」となることを目指す」としている。主催は、香川県を中心に国、関係市町、産業経済団体、大学、地域団体など 47 団体から構成される瀬戸内国際芸術祭実行委員会である。総合プロデューサーは公益財団法人福武財団理事長である福武總一郎氏、総合ディレクターはアートディレクターの北川フラム氏で、大規模アートプロジェクトの草分けとして知られる新潟県越後妻有地域で成功をおさめる「大地の芸術祭」²⁾と同じメンバーである。

図 1 に瀬戸内国際芸術祭 2016 の開催場所を、表 1 にこれまでの瀬戸内国際芸術祭の開催概要を示す。

図 1 瀬戸内国際芸術祭 2016 の開催場所



(出所) 瀬戸内国際芸術祭 2016 ホームページ

「瀬戸内国際芸術祭 2016」は、春、夏、秋の 3 つの会期に分けて、2016 年 3 月 20 日から 11 月 6 日まで断続的に計 108 日間開催された。海外作品を含む 206 の作品が展示されるとともに、重点プロジェクトとして「海でつながるアジア・世界との交流」「瀬戸内の「食」を味わう食プロジェクト」「地域文化の独自性発信」を実施し、来場者数はのべ 104 万 50 人に達した (図 2)。

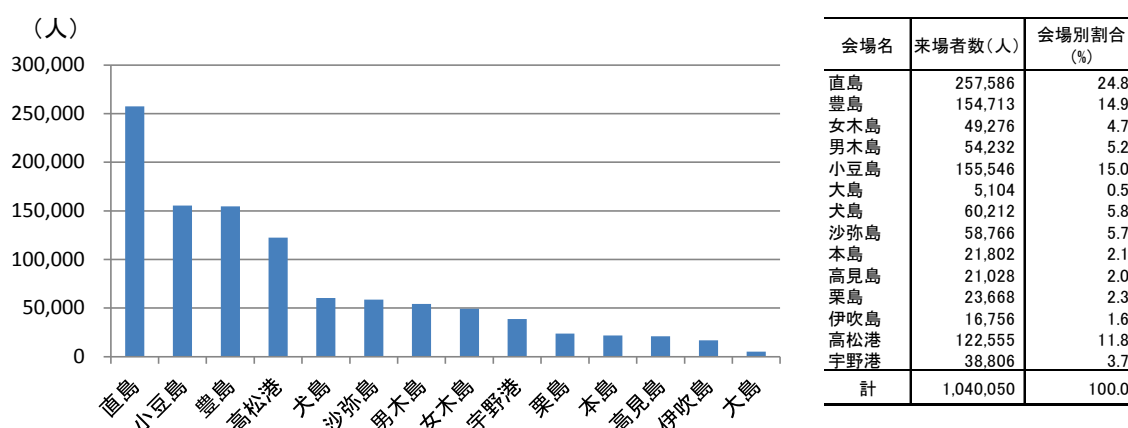
直島の来場者数が高島に比べて突出して高いのは、1992 年より島南部において宿泊、レストラン、ショップ等の機能と美術館を兼ねたベネッセハウスの展開を端緒に、民間企業である(株)ベネッセホールディングス及び(財)直島福武美術館財団によって家プロジェクトや地中美術館など多彩な文化事業が継続的に実施されているため、同島は「アートの島」とも呼ばれている。一方、小豆島南部の小豆島町では、島がもつ文化、伝統、産業、絆を情報発信する機会となる芸術祭が小豆島全域で開催されることを「百年の一度のチャンス」と捉え(塩出町長)、地域活性化効果が全島に波及するよう地域の魅力を高める地域政策を全力で展開している³⁾。

表 1 瀬戸内国際芸術祭の開催概要

区分	芸術祭2010	芸術祭2013	芸術祭2016
テーマ	海の復権	海の復権	海の復権
名称	瀬戸内国際芸術祭2010 「アートと海を巡る百日間の冒険」	瀬戸内国際芸術祭2013 「アートと島を巡る瀬戸内海の四季」	瀬戸内国際芸術祭2016 『海でつながるアジア・世界と交流』『瀬戸内の「島」を味わう「プロジェクト」』『地域文化の個性の発信』
会期(開場日数)	7.19-10.31 (105 日間)	春:3.20-4.21(33 日間) 夏:7.20-9.1(44 日間) 秋:10.5-11.4(31 日間) (計108 日間)	春:3.20-4.17(29 日間) 夏:7.18-9.1(49 日間) 秋:10.8-11.6(30 日間) (計108 日間)
会場	9 会場 直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、高松港周辺、宇野港周辺	14 会場 直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、沙弥島、本島、高見島、栗島、伊吹島、高松港周辺、宇野港周辺	14 会場 直島、豊島、女木島、男木島、小豆島、大島、犬島、沙弥島、本島、高見島、栗島、伊吹島、高松港周辺、宇野港周辺
参加アーティスト・プロジェクト数	18 の国と地域、75 組	26 の国と地域、200 組	34 の国と地域、226 組
アート作品数	76 点	207 点	206 点
イベント	16 企画	16 企画	38 企画
来場者数(人)	938,246	1,070,368 春:263,014 夏:435,370 秋:371,984	1,040,050 春:254,284 夏:401,004 秋:384,762
作品鑑賞 パスポート販売数	88,437 枚	92,094 枚	84,208枚
収入(3カ年)	793百万円	1,175百万円	1,388百万円(決見)
支出(3カ年)	689百万円	1,015百万円	1,238百万円(決見)

(出所)「瀬戸内国際芸術祭総括報告」(2010、2013、2016)等より筆者作成。

図 2 瀬戸内国際芸術祭 2016 の開催場所別来場者数



(出所)「瀬戸内国際芸術祭総括報告」(2016)より筆者作成。

写真1 瀬戸内国際芸術祭 2016 の開催の様子 (直島・豊島・小豆島)



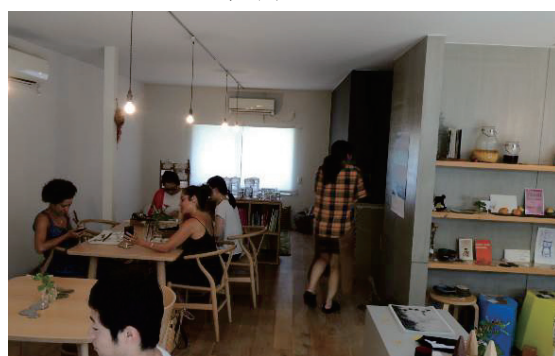
宇野港



直島



直島の新規開業飲食店 (外観)



同左 (内部)



豊島のまちなか案内板



ボランティア (こえび隊)



豊島美術館 (内部)



島民のおもてなし (小豆島)

(出所) 写真画像はすべて筆者撮影。

2 別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」

「混浴温泉世界」は、別府市中心市街地及び周辺地域において、国内外のアーティストが別府のために制作した作品の展示やパフォーマンスを行うアートプロジェクトで、2009年より3年に一度開催するアートプロジェクトとしてスタートした。来訪者は分散配置された作品を巡って地域間を回遊、散策し、地域の魅力と出会うしかけが随所に施されており、創作活動、観光まちづくり、温泉地めぐり、中心市街地活性化といった複合的な地域づくり効果が発揮できるよう設計されている（図3）。行政、地域団体、まちづくり団体、大学、企業等によって構成される別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」実行委員会が主催組織であり、NPO 法人 BEPPU PROJECT が事務局を担っている。

図3 混浴温泉世界 2009 会場展開図



(出所)「混浴温泉世界 別府現代芸術フェスティバル 事業報告書」(2009)

アートプロジェクトの企画趣旨は毎回異なるが、例えば「混浴温泉世界 2015」では「“世界は不思議に満ちている” 口当たりの良い分かりやすさばかりが求められ、ますます均質化する現代において、アーティストは世界の根源的な謎を提示し、我々の無限の想像力を解放し続けている。外国人の居住率が日本で最も高く、古くから多様な文化を受け入れてきた別府。独自の歴史をたどってきたこの場を舞台に、特徴のあるプロジェクトを展開する。」とされており⁷⁾、現代社会が抱える「均質化」という課題を見据えながら、別府という多様性に満ちた地域において展開する意欲がうかがえる。

2012年からは、別府市民の日常の文化活動の成果発表の場でもある「ベップ・アート・パフォーマンス」が同時開催され、相乗効果が得られるよう再設計された。2015年の「混浴温泉世界」は、総合プロデューサーとして事務局を担うNPO 法人 BEPPU PROJECT 代表理事の山出淳也氏、総合ディレクターはP3 art and environment の芹沢高志氏で、計4人のディレクターチームによって実施された。まちを劇場に仕立てた「アートゲートクルーズ」と呼ば

れるまちなかアートツアーが実施されるなど、単に展示会場を巡るだけでなく、ライブの魅力を重視した展開が行われた。これまで開催された「混浴温泉世界」の開催概要を表2に示す。「混浴温泉世界」という名称のアートプロジェクトは2015年で区切りをつけ、2016年以降は、国際的に活躍する一組のアーティストに限定した「In Beppu」という予約形式のアートプロジェクトとして再構築し、毎年開催することとしている。

表2 「混浴温泉世界」の開催概要

区分	混浴温泉世界2009	混浴温泉世界2012 「ベップアートマンス」	混浴温泉世界2015 「ベップアートマンス」
会期(開場日数)	2009年4月1日(土)～6月14日(日) 65日間	2012年10月6日(土)～12月2日(日) 58日間	2015年7月18日(土)～9月27日(日) 72日間
会場	大分県別府市内各所約20ヵ所 (中心市街地/鉄輪/別府国際観光 港)	大分県別府市内各所 (中心市街地/浜脇エリア/鉄輪エ リア/別府国際観光港エリア)	大分県別府市内各所 (中心市街地/鉄輪地区)
作品	アートゲートクルーズ(8組) わくわく混浴アパート ベップダンス ベップオンガク	8つのアートプロジェクト 関連イベント ベップアートマンス2012 (122団体、148プログラム)	アートゲートクルーズ(4組) ベップ・秘密のナイトダンスツアー 永久別府劇場・恐怖の館 わくわく混浴デパートメント 関連イベント等 ベップアートマンス2015 (71団体・個人、88プログラム)
パスポート販売枚数	3,012	7,676	628
来場者数(人)	92,000	171,292	107,299
総事業費(千円)	52,364	119,293	79,006

(注)「混浴温泉世界2012、2015」の来訪者数、総事業費は、同時開催された「ベップ・アート・マンス」を含む

(出所)「混浴温泉世界 別府現代芸術フェスティバル 事業報告書」(2009、2012、2015)より筆者作成。

写真2 混浴温泉世界 2015 開催風景



(※1) 別府市中心市街地



(※2) ベップ・秘密のナイトダンスツアー



(※1) 永久別府劇場「恐怖の館」



(※2) アートゲートクルーズの作品



(※3) ベップ・アート・マンス 2012



(※3) 同左



(※4) ベップ・アート・マンス 2015



(※4) 同左

(出所)「混浴温泉世界 別府現代芸術フェスティバル 事業報告書」(2015)及び筆者撮影。

(注) ※1 「混浴温泉世界 2015」, 筆者撮影

※2 「混浴温泉世界 2015」, 報告書より引用

※3 「ベップ・アート・マンス 2012」, 筆者撮影

※4 「ベップ・アート・マンス 2015」, 報告書より引用

IV 事例の比較分析

1 概要の比較

表3に、2つのアートプロジェクトの概要を比較した。開催場所の地域特性、開催規模、期間、地域課題は異なるものの、いずれも地域活性化を目的に、実施されている。事業規模の違いにより成果は異なるが、アートによって、断片化された地域資源を再構成し、作品化を行う手法は同一である。

表3：アートプロジェクトの概要比較

	瀬戸内国際芸術祭2016	別府現代芸術フェスティバル2015 「混浴温泉世界」「ベップ・アート・マンス」
開催地	香川県高松市、丸亀市、直島町、小豆島町、土庄町他(12島+2港湾)	大分県別府市
地域特性	島嶼部(瀬戸内海)	中心市街地(温泉地)
地域産業	漁業、非鉄金属製造業(直島)、食料品製造業(小豆島)	温泉関連サービス業(「卸売業、小売業」「宿泊業、飲食サービス業」)
開催目的	「海の復権」、島の活性化	文化芸術の振興、地域活性化、担い手育成
開催期間	2016年3月20日～4月17日、7月18日～9月4日、10月8日～11月6日	2015年7月18日～9月27日
開催日数	108日間	72日間
主体組織	実行委員会(47団体)	実行委員会(21団体)
事務局	瀬戸内国際芸術祭実行委員会事務局	NPO法人BEPPU PROJECT
ボランティア数(人)	1,100	453
来訪者数(人)	1,040,050	107,299
総事業費(千円)	1,238,000	79,006

※「混浴温泉世界2015」の来訪者数、総事業費は、同時開催された「ベップ・アート・マンス」を含む

(出所)「瀬戸内国際芸術祭総括報告」(2016)、「混浴温泉世界 別府現代芸術フェスティバル 事業報告書」(2015)より筆者作成。

2 来場者の比較

来場者属性のおおよその傾向を探るため、各アートプロジェクトで実施したアンケート調査結果を比較した(図4-1～3)。

図4-1 来場者属性の比較(性別)

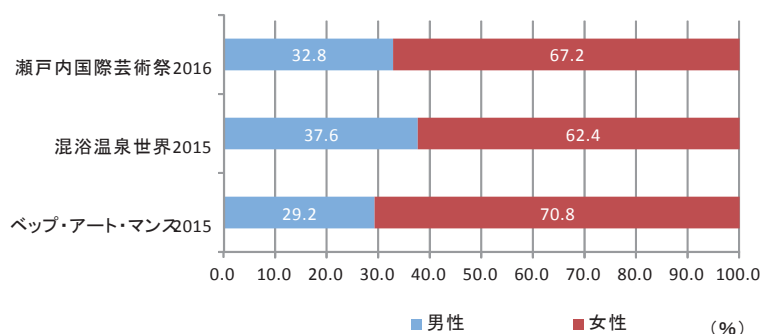


図 4-2 来場者属性の比較（居住地別）

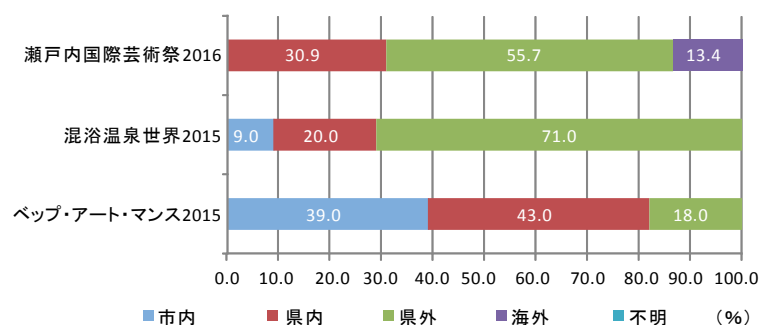
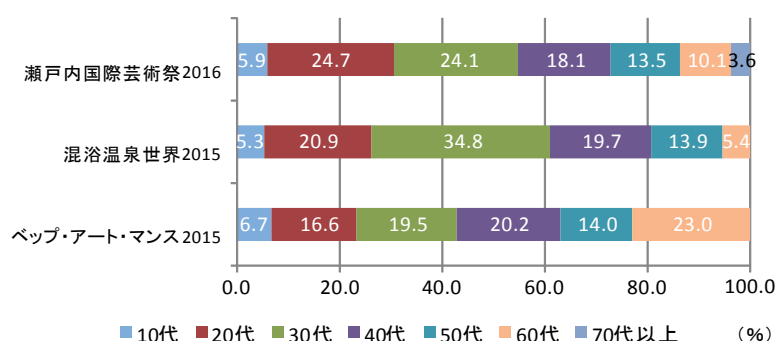


図 4-3 来場者属性の比較（年齢層別）



（出所）「瀬戸内国際芸術祭総括報告」（2016）、「混浴温泉世界 別府現代芸術フェスティバル 事業報告書」（2015）より筆者作成。

性別の属性を比較すると、「瀬戸内国際芸術祭」「混浴温泉世界」「ベップ・アート・マンズ」はいずれも男性は約 30%、女性は約 70%となっており、女性の比率が高い。

居住地別では、「瀬戸内国際芸術祭」では海外比率が約 13%、県外比率が約 56%と、広域からの来訪が認められ、「国際芸術祭」としての地位を確保しつつある。「混浴温泉世界」ではアンケート項目の関係で海外比率は明らかではないが、県外比率が約 71%と高くなっており、「瀬戸内国際芸術祭」と同じく広域からの来訪が多い。一方、「ベップ・アート・マンズ」は、市内比率が約 40%と「混浴温泉世界」とは来場者層が異なっており、市民参加型の文化イベントとなっている。

年齢層別では、いずれのアートプロジェクトも幅が広いが、「瀬戸内国際芸術祭」「混浴温泉世界」は「20代」「30代」の比率が高く、「ベップ・アート・マンズ」では、「50代」「60代」の比率が高くなっている。この結果から、「混浴温泉世界」と「ベップ・アート・マンズ」は相互補完関係となっており、同時開催することで相乗効果が生まれていることがわかる。

3 政策展開手法の比較

「瀬戸内国際芸術祭」は、共通テーマに基づく広域型アートプロジェクトで、瀬戸内海の「海の復権」を志向する一方、開催地区別の詳細を見ると、政策展開手法が異なっている。芸術祭の中核となる直島町は、民間企業が主導する文化事業を軸として展開しているのに対し、小豆島町では、芸術祭の開催を契機に行政主導で総合的な地域活性化を目指している。つまり、地域経済活性化を志向する直島町と地域社会活性化を視野に入れる小豆島町という構図である。なお、いずれの島も芸術祭終了後は、制作された作品のいくつかを恒久設置し、閉会後も島々をめぐる文化ツーリズムが行われており、観光集客の平年化が試みられている。

一方、「混浴温泉世界」は、企画サイドでは別府市中心市街地のまちなかに焦点をあてつつもあくまで現代アートの可能性を追求しているのに対し、別府市は ONSEN ツーリズム部が所管しており、文化観光政策としての位置づけである。

2009年、2012年は、まちなかに設置された作品群を来訪者が自由に訪れる手法を採用しているのに対し、2015年の企画では、ツアー方式を採ることによって来訪者が容易に立ち入ることのできない世界を知るしかけを設けている⁵⁾。来訪者の人数をあえて制限し、別府をより強く印象づける手法を採ることで、芸術祭のリピーター層の獲得だけでなく日常的にも別府を支援するディープな支援層の開拓を指向している。近年は、周辺地域である国東半島芸術祭の開催、大分市、由布市、竹田市とのアートプロジェクトのネットワーク化などの実験的な試みも行うなど、アートプロジェクトによる地域活性化の可能性を追求している。

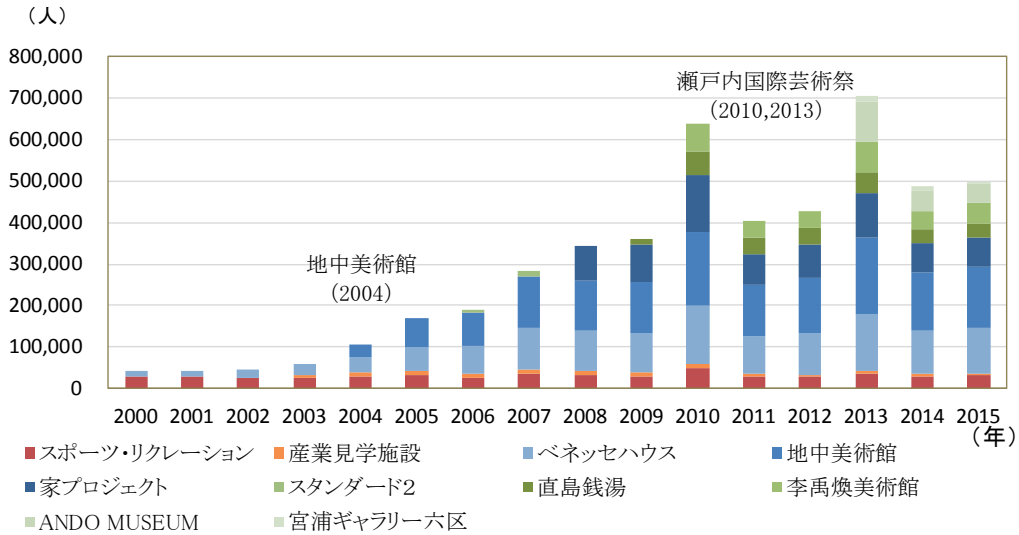
V 地域経済社会の変化

アートプロジェクトの目的が地域再生や地域活性化にあるならば、文化イベントとしての一過性の活性化効果を越えて、地域の持続的発展にどの程度貢献できるのかが問われなければならない。そこで、本稿では基礎的分析として、観光（観光入込客数）、人口（国勢調査、住民基本台帳等）、地域経済（経済センサス）に関する統計資料をもとに、開催地が所在する市町の地域経済社会の変化を概観してみたい。なお、分析の主たる対象期間は、アートプロジェクトの開始年（瀬戸内国際芸術祭は2010年⁶⁾、混浴温泉世界は2009年に開始）を踏まえ、10年～15年間とした。

1 観光

図5に、2000年以降の直島町の観光入込客数の推移を示した。2004年に世界的な知名度をもつ地中美術館の開設を契機に観光客数が増加していることがわかるが、さらに瀬戸内国際芸術祭の開催年（2010年、2013年）は突出して観光入込客数が増加しており、直島町を訪れる観光客の主たる目的は「芸術文化」であることがわかる。

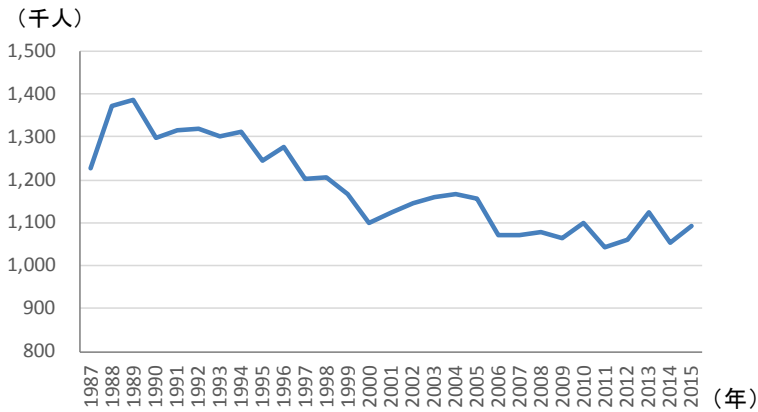
図5 直島町観光客数等入込数推移



(出所) 直島町観光協会資料より筆者作成。

図6は、1987年以降の小豆島の観光入込客数の推移である。長期減少傾向にあるが、瀬戸内国際芸術祭が開催された2010年と2013年は、やや増加していることがわかる。

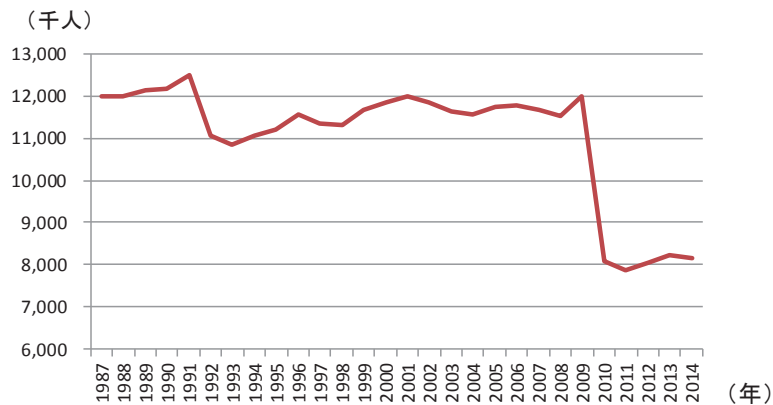
図6 小豆島観光客数等入込数推移



(出所) 香川県観光動態調査報告より筆者作成。

図7は、別府市の観光入込客数の推移である。現在、別府八湯と呼ばれる市内八か所の温泉地をめぐるまち歩き中心に、周辺観光施設への立ち寄りと合わせて、年間約800万人が訪れている。なお、2010年にみられる「段差」は、集計方法の見直しによるものである。

図7 別府市観光客数等入込数推移



(出所) 別府市観光動態調査より筆者作成。

表4 : アートプロジェクトによる来訪者数インパクト比較

	直島町	小豆島	別府市
来訪者数 (アートプロジェクト)	462,471 (2015年)	196,357 (2013年)	107,299 (2015年)
年間来訪者数	497,381 (2015年)	1,093,000 (2013年)	8,165,065 (2015年)
比率(%)	93.0	18.0	1.3

(出所) 前掲関連資料より筆者作成。

アートプロジェクトの開催が、どの程度のインパクトがあるのかを探るため、各アートプロジェクトによる来訪者数の当該地域の年間来訪者数に対する比率を示した(表4)。小豆島の観光客数は100万人を超えるため、瀬戸内国際芸術祭による20万人は、18%程度の寄与であることがわかる。別府市では、混浴温泉世界とベップ・アート・マンスを合わせても10万人程度の来訪に過ぎず、ほとんど寄与していないことがわかる。アートプロジェクトの開催による交流人口の増加への寄与が大きいのは直島町であり、地域経済社会に大きなインパクトを与えていると見込まれる。

2 人口

国勢調査に基づき開催地の所在市町の人口推移をみると、2000年を100.0としたときの2015年の人口増加率は、直島町が95.5、小豆島町が84.6、別府市が96.6といずれの市町も減少傾向にあるが、とりわけ小豆島町の減少幅が大きい。1920年以降の長期人口推移を図8に示した。小豆島町は戦後一貫して人口減少が続いており、直島町も1955年以降、人口減少が続いている。別府市は、1980年までは人口増加であったが、緩やかな人口減少局面に入っている。

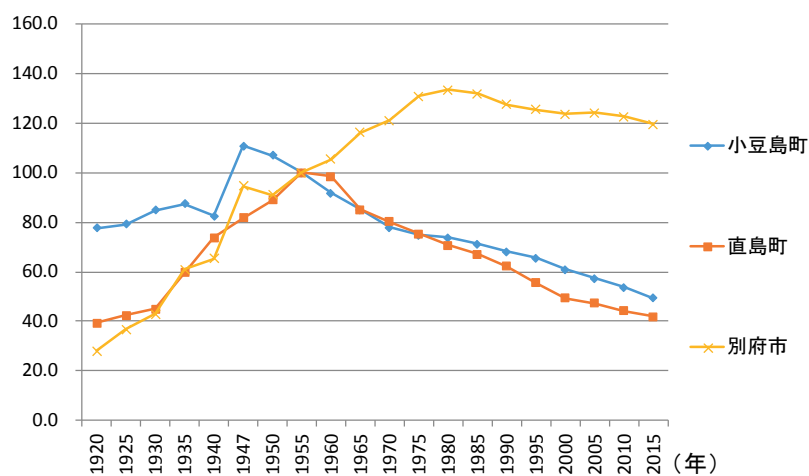
表 5 : 開催地の人口推移

(単位: 人、%)

	年	1990	1995	2000	2005	2010	2015
人口	直島町	4,671	4,162	3,705	3,538	3,325	3,142
	小豆島町	20,455	19,700	18,303	17,257	16,152	14,870
	別府市	130,334	128,255	126,523	126,959	125,385	122,193
人口増加率 (2000年 = 100.0)	直島町	101.3	100.8	100.0	99.1	98.0	95.5
	小豆島町	126.1	112.3	100.0	95.5	89.7	84.8
	別府市	103.0	101.4	100.0	100.3	99.1	96.6
昼間人口	直島町	4,548	4,104	3,751	3,756	3,653	
	小豆島町	19,954	19,400	18,112	17,161	16,164	
	別府市	126,486	123,217	121,789	123,054	122,959	
昼夜間人口比率	直島町	97.7	98.6	101.2	106.2	109.9	
	小豆島町	97.6	98.5	99.0	99.4	100.1	
	別府市	97.1	96.1	96.4	97.1	98.1	

(出所)「国勢調査」(総務省統計局)(2015年は速報値)より筆者作成。

図 8 開催市町の長期人口推移



(出所) 国勢調査 (総務省統計局) より筆者作成。

一方、昼夜間人口比率は、直島町、小豆島町で増加傾向にある。直島町の増加幅が大きい要因として、対岸の岡山県玉野市からの海上交通アクセスが相対的に良好であるため、域外からの従業を有利にしているのではないかと考えられる (表 5)。

さらに産業別昼夜間人口の状況を見たのが表 6 である。小豆島町の昼間人口の増加は、「医療、福祉」「製造業」によるのに対し、直島町の昼間人口の増加は、「製造業」、「サービス業 (他に分類されないもの)」「運輸業、郵便業」、「宿泊業、飲食サービス業」と続く。別府市の昼間人口は「医療、福祉」「宿泊業、飲食サービス業」で増加しているものの、他の産業では概ね流出しており、総数でも流出している。

表6：開催市町における15歳以上産業別就業者数（常住地、従業地）の比較

（単位：人）

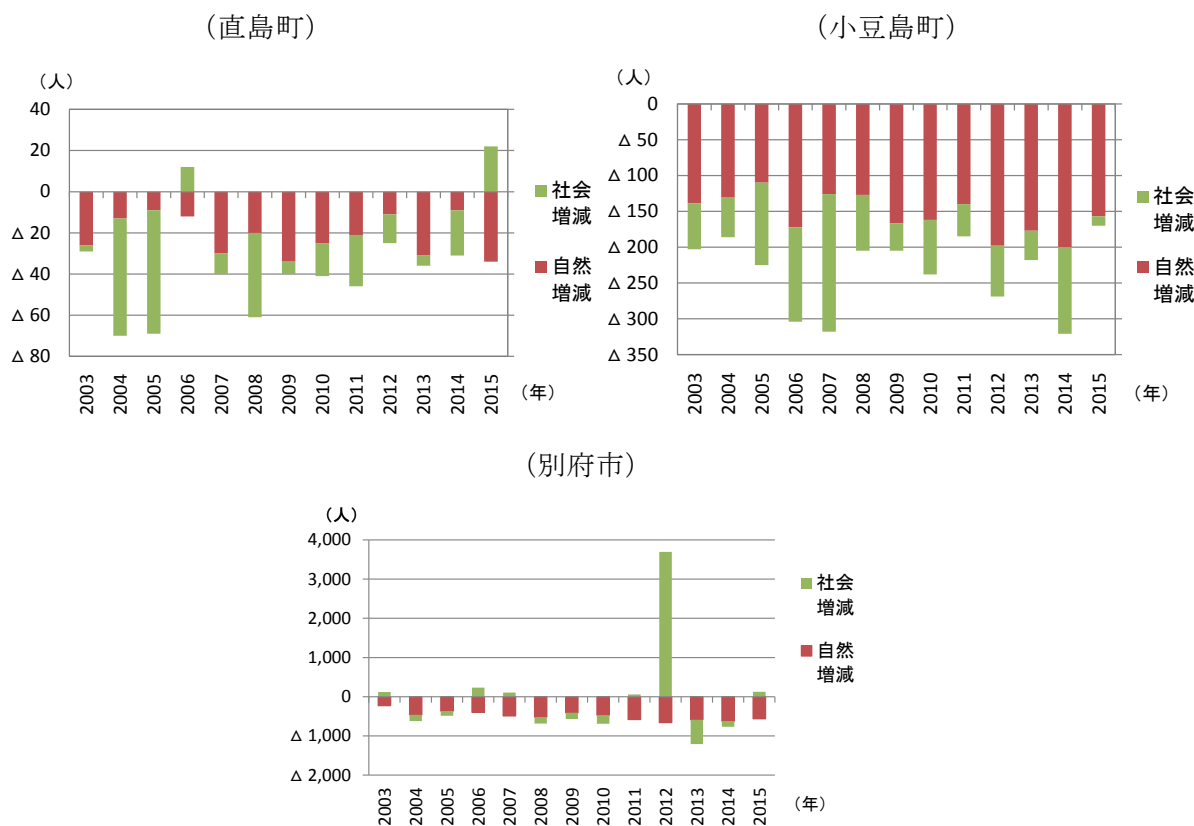
	小豆島町				直島町			
	夜間人口(15歳以上就業者数)	昼間人口(15歳以上就業者数)	昼間人口-夜間人口(15歳以上就業者数)	昼夜間人口比率(15歳以上就業者数)	夜間人口(15歳以上就業者数)	昼間人口(15歳以上就業者数)	昼間人口-夜間人口(15歳以上就業者数)	昼夜間人口比率(15歳以上就業者数)
総数	7,191	7,331	140	1.02	1,701	2,094	393	1.23
A 農業、林業	268	277	9	1.03	8	12	4	1.50
うち農業	268	277	9	1.03	-	2		
B 漁業	140	141	1	1.01	123	132	9	1.07
C 鉱業、採石業、砂利採取業	27	33	6	1.22	-	-		
D 建設業	510	539	29	1.06	130	166	36	1.28
E 製造業	1,958	2,069	111	1.06	456	600	144	1.32
F 電気・ガス・熱供給・水道業	50	54	4	1.08	13	15	2	1.15
G 情報通信業	18	7	△ 11	0.39	7	9	2	1.29
H 運輸業、郵便業	459	488	29	1.06	199	243	44	1.22
I 卸売業、小売業	1,092	1,002	△ 90	0.92	140	145	5	1.04
J 金融業、保険業	80	64	△ 16	0.80	15	10	△ 5	0.67
K 不動産業、物品賃貸業	33	33	0	1.00	2	2	0	1.00
L 学術研究、専門・技術サービス業	99	98	△ 1	0.99	16	20	4	1.25
M 宿泊業、飲食サービス業	468	417	△ 51	0.89	176	219	43	1.24
N 生活関連サービス業、娯楽業	235	209	△ 26	0.89	40	33	△ 7	0.83
O 教育、学習支援業	236	274	38	1.16	80	110	30	1.38
P 医療、福祉	760	880	120	1.16	92	108	16	1.17
Q 複合サービス事業	156	144	△ 12	0.92	22	25	3	1.14
R サービス業(他に分類されないもの)	307	298	△ 9	0.97	99	155	56	1.57
S 公務(他に分類されるものを除く)	280	290	10	1.04	70	70	0	1.00
T 分類不能の産業	15	14	△ 1	0.93	13	20	7	1.54

	別府市			
	夜間人口(15歳以上就業者数)	昼間人口(15歳以上就業者数)	昼間人口-夜間人口(15歳以上就業者数)	昼夜間人口比率(15歳以上就業者数)
総数	55,117	51,864	△ 3,253	0.94
A 農業、林業	586	519	△ 67	0.89
うち農業	558	504	△ 54	0.90
B 漁業	64	62	△ 2	0.97
C 鉱業、採石業、砂利採取業	1	2	1	2.00
D 建設業	3,746	3,201	△ 545	0.85
E 製造業	3,880	2,094	△ 1,786	0.54
F 電気・ガス・熱供給・水道業	227	260	33	1.15
G 情報通信業	661	418	△ 243	0.63
H 運輸業、郵便業	2,391	1,967	△ 424	0.82
I 卸売業、小売業	9,748	9,190	△ 558	0.94
J 金融業、保険業	1,224	1,114	△ 110	0.91
K 不動産業、物品賃貸業	949	893	△ 56	0.94
L 学術研究、専門・技術サービス業	1,145	956	△ 189	0.83
M 宿泊業、飲食サービス業	6,290	6,519	229	1.04
N 生活関連サービス業、娯楽業	2,868	2,898	30	1.01
O 教育、学習支援業	2,740	2,895	155	1.06
P 医療、福祉	9,222	10,120	898	1.10
Q 複合サービス事業	275	236	△ 39	0.86
R サービス業(他に分類されないもの)	3,692	3,396	△ 296	0.92
S 公務(他に分類されるものを除く)	2,655	2,479	△ 176	0.93
T 分類不能の産業	2,753	2,645	△ 108	0.96

（出所）「平成22年国勢調査」（総務省統計局）より筆者作成。

一方、住民基本台帳に基づく人口動態を見ると、いずれの市町も自然減、社会減となっているが、社会減は縮小傾向にある（図9）。小豆島町では、芸術祭を契機としたまちづくりに取り組んでいるものの、社会減は収まっていない。そこで小豆島町では人口移動に関する独自の詳細調査を実施するなどU I J ターンによる社会増に向けた政策を加速化している。なお、別府市の2012年の急増は、制度改正により、外国人住民が住民基本台帳に含まれるようになったことによる。

図9 開催市町の人口動態推移



(出所) 香川県人口移動調査報告、別府市統計所（平成 27 年版）より筆者作成。

以上の結果より、開催市町の人口を比較すると、①定住人口はいずれの市町も減少している。②昼夜間人口比率をみると、直島町、小豆島町で増加傾向にあるが、直島町の増加幅が大きい。昼間人口そのものはいずれの市町も減少傾向にあるが、産業別では、直島町の昼間人口の増加は、「製造業」、「サービス業（他に分類されないもの）」「運輸業、郵便業」、「宿泊業、飲食サービス業」の順となっている。③人口動態では、いずれの市町も自然減、社会減となっているが、社会減は縮小傾向にあることがわかった。

3 地域経済

アートプロジェクトによる地域経済への貢献するひとつの切り口として、平成 26 年経済センサス基礎調査結果を利用して、アートプロジェクトが開催された所在市町における事業所数及び従業者数の新規開設分析を行った。アートプロジェクト開始年は、瀬戸内国際芸術祭が 2010 年、混浴温泉世界が 2009 年であるため、平成 17 年（2005 年）以降の新規開設状況に注目した。結果を表 7 に示す。

事業所数ベースの平成 17 年～26 年の全期間に対する新規開設比率は、小豆島町は 11.2%、直島町は 31.1%、別府市は 23.4%となっている。直島町は 31.1%と香川県全体の 23.1%を

上回っており、新規開設が活発になされていることがわかる。一方、従業者数ベースで見ると、小豆島町は 10.8%、直島町は 10.6%、別府市は 22.1%となっている。事業所数ベースで香川県全体を上回った直島町であるが、従業者数ベースでは香川県全体の 23.3%に達しておらず、新規開設に伴う従業者の増加の寄与は限定的であることを示している。

表 7：開催市町における開設年別事業所数及び従業者数の比較

(単位:箇所)

事業所数(全産業)		香川県	小豆島町	直島町	大分県	別府市
実数	総数	48,510	1,013	209	54,521	5,894
	昭和59年以前	18,872	586	98	19,719	2,408
	昭和60年～平成6年	7,719	159	18	9,210	907
	平成7年～16年	9,907	144	27	11,532	1,123
	平成17年～26年	11,385	112	65	13,297	1,380
構成比 (開設年別)	総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	昭和59年以前	38.4	57.8	46.9	36.2	40.9
	昭和60年～平成6年	15.2	15.7	8.6	16.9	15.4
	平成7年～16年	22.3	14.2	12.9	21.2	19.1
	平成17年～26年	23.1	11.1	31.1	24.4	23.4

(単位:人)

従業者数(全産業)		香川県	小豆島町	直島町	大分県	別府市
実数	総数	437,572	6,033	2,160	487,503	213,591
	昭和59年以前	168,112	3,825	1,311	184,431	77,735
	昭和60年～平成6年	66,620	926	286	74,244	30,983
	平成7年～16年	97,539	588	305	107,583	47,872
	平成17年～26年	101,069	650	229	116,345	54,290
構成比(開設年別)	総数	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0
	昭和59年以前	38.4	63.4	60.7	37.8	42.2
	昭和60年～平成6年	15.2	15.3	13.2	15.2	11.9
	平成7年～16年	22.3	9.7	14.1	22.1	22.9
	平成17年～26年	23.1	10.8	10.6	23.9	22.1

(出所)「平成 26 年経済センサス基礎調査」(総務省統計局)をもとに筆者作成。

これらの結果より、平成 17 年以降で 3 つの市町のうち顕著な変化が認められるのは直島町の開設事業所数であるため、対象市町を直島町に絞り、さらに産業別動向を探った。

事業所数ベースの平成 17 年以降の開設年別構成比は、「宿泊業、飲食サービス業」が 74.1%、産業別構成比でも「宿泊業、飲食サービス業」が 66.2%となっており、直島町の平成 17 年度以降の新規開設は、「宿泊業、飲食サービス業」が突出して高いウェイトを占めていることがわかる。「宿泊業、飲食サービス業」の新規開設の要因として、同町の観光入込客数の推移と照合すると、新規開設は、民間事業者による文化事業及び瀬戸内国際芸術祭の開催によってもたらされたと考えられる。一方、従業者数ベースの平成 17 年以降の開設年別構成比は、「宿泊業、飲食サービス業」が 34.4%、産業別構成比では「宿泊業、飲食サービス業」が 56.3%となっている(表 8)。

表 8 : 開催市町における開設年別産業別事業所数及び従業者数の比較

(単位:箇所)

直島町事業所数		A~R 全産業 (S 公務を除く)	A~B 農林漁業	C~R 非農林漁業 (S公務を除く)	M 宿泊業, 飲 食サービス業
実数	総数	209	19	190	58
	昭和59年以前	98	13	85	6
	昭和60年~平成6年	18	4	14	3
	平成7年~16年	27	2	25	6
	平成17年~26年	65	0	65	43
構成比 (開設年 別)	総数	100.0	100.0	100.0	100.0
	昭和59年以前	46.9	68.4	44.7	10.3
	昭和60年~平成6年	8.6	21.1	7.4	5.2
	平成7年~16年	12.9	10.5	13.2	10.3
	平成17年~26年	31.1	0.0	34.2	74.1
構成比 (産業 別)	総数	100.0	9.1	90.9	27.8
	昭和59年以前	100.0	13.3	86.7	6.1
	昭和60年~平成6年	100.0	22.2	77.8	16.7
	平成7年~16年	100.0	7.4	92.6	22.2
	平成17年~26年	100.0	0.0	100.0	66.2

(単位:人)

直島町従業者数		A~R 全産業 (S 公務を除く)	A~B 農林漁業	C~R 非農林漁業 (S公務を除く)	M 宿泊業, 飲 食サービス業
実数	総数	2,160	123	2,037	375
	昭和59年以前	1,311	89	1,222	35
	昭和60年~平成6年	286	24	262	189
	平成7年~16年	305	10	295	22
	平成17年~26年	229	0	229	129
構成比 (開設年 別)	総数	100.0	100.0	100.0	100.0
	昭和59年以前	60.7	72.4	60.0	9.3
	昭和60年~平成6年	13.2	19.5	12.9	50.4
	平成7年~16年	14.1	8.1	14.5	5.9
	平成17年~26年	10.6	0.0	11.2	34.4
構成比 (産業 別)	総数	100.0	5.7	94.3	17.4
	昭和59年以前	100.0	6.8	93.2	2.7
	昭和60年~平成6年	100.0	8.4	91.6	66.1
	平成7年~16年	100.0	3.3	96.7	7.2
	平成17年~26年	100.0	0.0	100.0	56.3

(出所)「平成26年経済センサス基礎調査」(総務省統計局)をもとに筆者作成。

4 小括

これまでの分析結果から、観光入込客数、人口動態、新規開設の動きが顕著であるのは直島町である。直島町では観光客数の増加を背景に、「宿泊業、飲食サービス業」を中心に事業所の新規開設が増加したものの、雇用吸収力は現時点では限定的であることがわかった。

こうした地域による差異は、直島町は離島でありながらも対岸の岡山県玉野市との距離が近いこと、民間事業者による文化事業が継続的に展開され、高級宿泊施設や世界的レベルの美術館が設置運営されていること、そのため文化鑑賞を目的とした日常的な来訪者の存在が示唆され、アートプロジェクトが一過性のイベントではなく、民間事業者が継続的に運営する文化事業の一環として定着しているためと推察される。

VI まとめ

地域指向型アートプロジェクトは、文化的資源の創造とまち歩きによる文化ツーリズムを通じて地域イメージの向上や観光消費による経済的効果に加え、地域住民やアーティスト、ボランティアなどとの交流を通じた地域の誇りやアイデンティティの形成による社会的効果、文化的資源の創造、文化活動の誘発や教育効果など多面的な地域活性化効果が期待されている。これまで、多くの地域ではかかる多面的効果に着目して、アートプロジェクトが精力的に行われているが、その効果にかかる検証は十分ではなかった。

本稿では、地域活性化手法の一つとして注目を集める地域指向型アートプロジェクトの可能性を検討するため、2つのアートプロジェクトにおける3つの地域を事例に、観光、人口、経済分野の公的統計を用いて特に地域経済面での変化に焦点を当てた基礎的分析を行った。結果を要約すると、アートプロジェクトによる観光入込客数は直島町で顕著であり、そのインパクトも大きい。また、いずれの市町も定住人口の増加までは寄与していないものの、昼夜間人口比率を見ると直島町は増加傾向にあることに加え、直島町、小豆島町での社会減は緩和傾向にある。一方、経済センサスにより新規開設状況を点検したところ、直島町では事業所数ベースでは「宿泊業、飲食サービス業」の新規開設比率が県全体を上回ったが、従業者数ベースでは下回っており、雇用吸収力への効果は限定的であることがわかった。

これらの結果より、地域指向型アートプロジェクトは、文化イベントとしての地域活性化効果は認められるものの、人口増加や地域経済の継続的な活性化を図るには、現段階では定常的な来訪を可能とする継続的なしくみが必要となる可能性が示唆された。しかし、地域社会の活性化は経済的効果だけではない。地域の誇り、いきがいの創出、コミュニティ形成など豊かな地域社会の創造を図る社会的効果や、未来の地域づくりの担い手の育成に資する教育的効果などの定量評価になじまない政策効果の検証は、評価手法の開発も含めて更なる検討が必要である。

本稿を終えるにあたり、地域指向型アートプロジェクトの今後の課題をいくつか指摘しておきたい。

第一に、地域住民、ボランティア、アーティストなどの交流は地域社会の活性化には貢献するものの、経済的価値に十分組み込まれていない。また、直島町の文化事業者を除くと、地域経済を担う既存の事業者のアートプロジェクトへの関与がほとんど見られない。より多くの地域内アクターの参画によって、新たな地域活性化に向けた連鎖的展開が求められよう。

第二に、来訪者の通年化に向けて、新たに創作された作品を文化的資源の創造と位置付け、プロジェクト終了後も訪れるしかけが必要であるが、作品の維持管理費などの負担をだれが担うのかが明らかではない。かかる文化的資源の存在が地域イメージの向上に寄与することを考えると、一定の公的助成等の枠組みが必要ではないか。

第三に、アートプロジェクトは、開催規模やプログラム開発、アーティストの選定と折

衝、地域社会との調整、文化ツーリズムの事業企画、ボランティアの確保、資金・人材の調達等、専門的能力と総合的マネジメントが必要となる。すでに蓄積されたアートマネジメントノウハウを、広く普及促進させることが求められる。

第四に、アートプロジェクトの多くは実行委員会組織によって構成されている。そのため、プロジェクトの方向性は一枚岩とはいえない。とりわけ、創作の自由度を求めるアートプロジェクト企画サイドと、交流人口の増加によって地域活性化を図りたい行政の思惑は必ずしも一致しない。かかる参画アクターの多元性をどのように収斂させ、地域の価値創造に向けた方向性を打ち出すことができるのかも今後の課題であろう。その意味で、有形無形の地域資源を用いて創作活動を行い、地域住民や事業者など地域内のアクターとの有機的な関連付けながら実施することで、地域経済社会に多元的な効果が期待される地域指向型アートプロジェクトは、今なお発展途上と言わざるを得ない。

別府市では、2016年度より新しいアートプロジェクトのあり方への模索が始まったところである。現在の地域活性化モデルに見られる創作作品めぐりによる観光政策との結合だけでなく、アートと地域産業との結合によるイノベーションの創出といった産業政策への寄与など、持続的な地域経済社会の活性化に向けて創作活動がどのような役割を担えるのか、新たなステージへの挑戦に期待したい。

(本学 法学部政策科学科 教授・地域戦略研究所兼任所員)

【参考文献(引用文献)】

- 秋元雄史(2015)『日本列島「現代アート」を旅する』小学館。
- 北川フラム(2014)『美術は地域をひらく 大地の芸術祭 10 の思想』現代企画室。
- 澤村明編(2014)『アートは地域を変えたか』慶応技術大学出版会。
- 瀬戸内国際芸術祭実行委員会(2010)(2013)(2016)『瀬戸内国際芸術祭 総括報告』。
- 田代洋久(2010)「文化的資源の多元的結合による地域活性化に関する考察ー越後妻有と直島を事例として」『創造都市研究』第6巻第2号, pp71-88, 大阪市立大学創造都市研究会。
- 田代洋久(2014)「地域性と結合した文化的資源の創造による島の活性化ー直島町・小豆島町」『創造農村』学芸出版社。
- 別府現代芸術フェスティバル実行委員会事務局(2009)(2012)(2015)『混浴温泉世界 別府現代芸術フェスティバル 事業報告書』。
- 別府現代芸術フェスティバル「混浴温泉世界」実行委員会(2013)『平成24年度文化芸術創造都市モデル事業に関する成果報告書』。
- 福武總一郎+北川フラム(2016)『直島から瀬戸内国際芸術祭へー美術が地域を変えた』現代企画室。
- 藤田直哉編(2016)『地域アート 美学／制度／日本』堀之内出版。

[注]

- 1) 地方都市や中山間地域におけるアートを活用した地域再生は、「都市」と対比する意味で「創造農村」モデルとも呼ばれる。
- 2) 「大地の芸術祭」は、人口減少・高齢化に悩む新潟県越後妻有地域(十日町市、津南町)において、地域に内在する様々な価値を、アートを媒介として掘り起こし、その魅力を高めて世界に情報発信することで地域再生を図る広域で展開される大規模アートプロジェクトである。
- 3) 直島の文化事業及び小豆島町の芸術祭関連の地域政策の展開に関しては、田代(2014)を参照のこと。
- 4) 「混浴温泉世界 別府現代芸術フェスティバル 事業報告書(2015)」より。
- 5) 単に観光地を見て回るだけでなく、アートを通じたワークショップへの参加や体験学習などを通して、感動や体験の共有を図るツーリズムは、クリエイティブ・ツーリズムともいわれる。
- 6) 先にも言及したとおり、瀬戸内国際芸術祭の中核地である直島町では、榑ベネッセホールディングスによる文化事業が1990年代初頭より取り組まれている。

STUDIES
OF
INSTITUTE FOR
REGIONAL STRATEGY
CONTENTS

Comparative Analysis and Consideration of Regional Revitalization Effect
conducted by Region-Oriented Art Projects Hirohisa TASHIRO…… 17

No.2
March 2017
INSTITUTE FOR REGIONAL, STRATEGY
THE UNIVERSITY OF KITAKYUSHU
KITAKYUSHU CITY, JAPAN